

阿波公方と結城良悟れうこに関する二つの考察

三木 計男

はじめに

平成 18 年、(シルバール大 学 校)大学院の卒業論文で、『ディオゴ結城了雪の身元』について発表した。

その調査過程を要約すると、県立文書館所蔵の近藤家文書(コン 2 - 131) \*<sup>1</sup>の中で、「不慶ばてれん伴天連あるいは伴天連れうこ」と呼ばれている殉教者(三代阿波公方足利義種の妻祐賀の兄)が、イエズス会の記録に残る「ディオゴ結城神父」であると思われたので、長崎の故結城了悟氏に、(れうことディオゴのほぼ合致した)経歴対比表

(拙著『ディオゴ結城了雪と阿波公方』\*<sup>2</sup> P258 参照)を添えてご判断を仰いだことから協同研究が始まった。その中で、同じ信徒名を欧文と和文で記した切支丹時代の名簿(スペイントレド管)

区文書館所蔵、前拙著 P250 参照)が見つかり、霊名「Diogo」はすべて「レウコ」と書かれていることが解った。さらに足利

家系図(『足利家文書 2 - II - 12 系図』\*<sup>3</sup> 初出徳島新聞、京都在住足利典子氏所蔵、前拙著 p252 参照)から、不慶(れうこ)の姓が結城氏であることが判明、さらに加

えて、ディオゴ結城筆の『論語抄』が現存(当時、東京神田一誠堂書店所蔵、同書肆より写真 5 葉を譲り受け筆者が所蔵、前拙著 P298 参照)して、それに「伊留満いるまん

結城良悟、Yuqi Diogo」と自署されていることから、近藤家文書の「れうこ伴天連」は、「ディオゴ結城神父」に紛れないことが確かめられた。

本稿ではその後検討した 2 点につき述べる。

## 1 『足利家文書 2 - II - 12 系図』\*<sup>3</sup>の評価

標記系図は、祐賀(れうごに)が結城姓であることを示す貴重な史料ではあったものの不審な点も多い。以下これにつき検討する。

高山右近らとともにマニラへ追放されたれうこは、追放翌年の元和 2(1616)年密かに帰国、平島の兄兵庫(祐賀の夫、義種の家来)の所で1ヶ月ほど逗留、祐賀の兄兵庫、祐賀、祐賀の娘飛め、祐賀の甥勘兵衛(祐賀の夫、義種の家来)、同宗徳(同前)、勘兵衛の姉婿岡藤左衛門(同前)に洗礼を授けた。のち、元和 4 年蜂須賀蓬庵の宗門改めを受け、祐賀・娘飛めら女性は改宗を誓い、誓紙を差し出して平島在住を許されたが、男性はすべて阿淡両国を国払いとなった(国払いとなった男性につき随った女性)(近藤家) \* 1。  
(がいたかも知れないがつまびらかでない)(文書)

次の図の上部には、近藤家文書(一部荒井家)など(文書で補完)

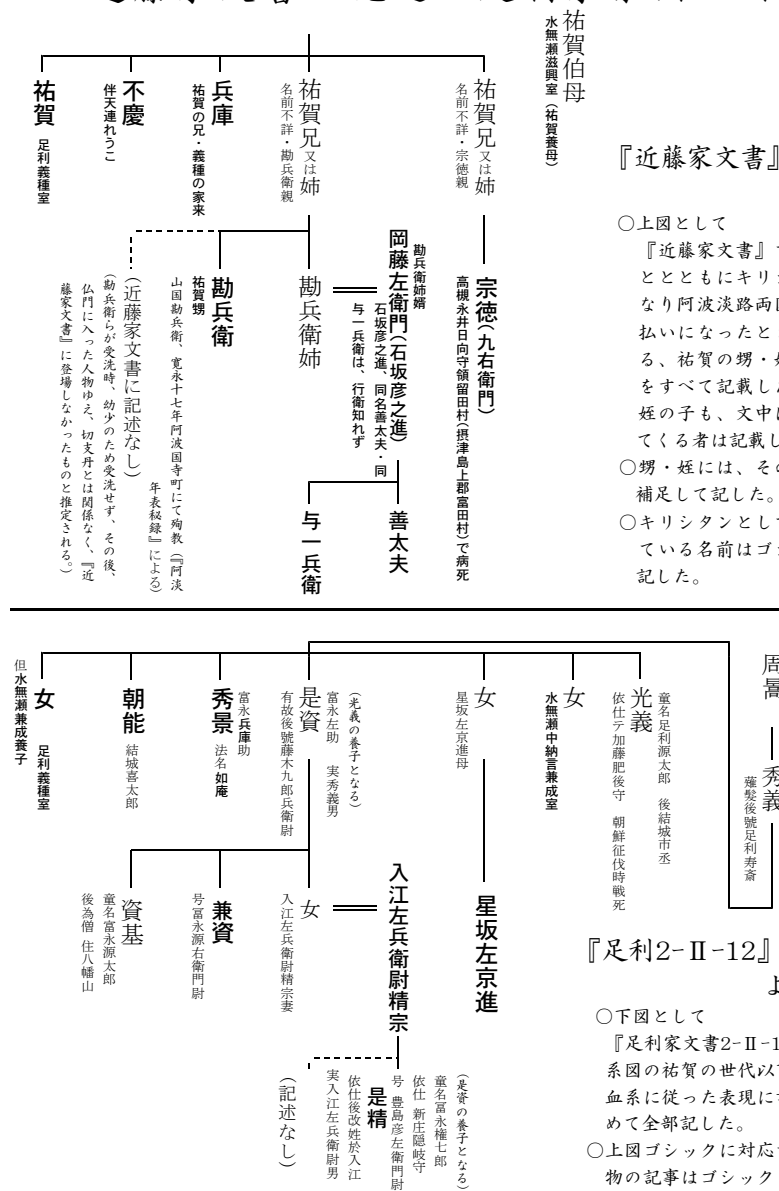
からわかる、国払いとなった男性のその後(正保3年時点)の消息を、系図に付記する形で纏め記した。

なお古文書の中で、改名している旨、記されている者は、( ) 中に改名後の名を付記した。

図の下部には 近藤家文書の記述と足利家系図の対比

『足利家文書 2-II-12 系図』

のうち、周髡・秀義を右端に配置し、祐賀の世代以下のとりわけて詳細に書かれた部分をすべて図示した。その際原系図では、是資は「実秀義男」とあり、是精は「実入江左兵衛尉男」とあるので、この二人は血系に従った配置に直して記した。



上下の図を比較すると、ディオゴ結城了雪から洗礼を受け「追放されたキリシタン類族図」の意味を持つ上図と、『足利家文書 2-Ⅱ-12系図』を血系に従い書き直した下図の形が見事に対応し整合していることがわかる。

このことから『足利家文書 2-Ⅱ-12系図』は、藩にキリシタンであったことが把握されている関係者を網羅して、祐賀・れうことの関係と追放後の消息を、曲がりなりにも説明できるよう配慮しつつ、自家の心覚えとして作成されたものといえよう(前頁の図では省略したが原系図では、平島家当主が義次・義景と書かれている。藩への提出文書では、又八郎・又次郎の名が使われる)。

そのためか上図「石坂彦之進」、下図「星坂左京進」という名の間には、「大石内蔵助」を「大星由良之助」とした戯作者ぶりさえ窺われる。

また元来この系図の構成は血系を系線で結んだ系図でなく、家督相続者(家の後継者)を系線で結んだ系図である(養子縁組などで家の後継者となったと説明する系図は、血系を示す系図より、恣意性を紛れ込め易からう)。

これらからこの系図には恣意的な作為が感じられる。祐賀(れうこにとっても)を周髡の流れとする点や、水無瀬兼成の妻(近藤家文書では伯母)を祐賀の姉とする点に

も、作為が及んでいるもののように思われる。

## 2 「れうこ」が捕縛された場所について

前論文では近藤家文書を根拠に、<sup>リョウゴ</sup>れうこが捕らわれたのは「大坂の山中」との西洋の記録は誤りで、「阿波讃岐の国境」が正しいとしていた。

ところがその後『阿波志』\*<sup>4</sup>(板野郡、氏族の項)に

安芸飛驒 姓橘宗長の族、土佐安芸郡の人、  
(中略) 昔賊不慶なる者あり讃岐引田浦に  
泊す高松侯之を誅す。時に流言あり (後略)  
との記述が見つかり、舟で脱出した「れうこ」  
が、引田に上陸し捕らわれたことがわかった。  
このことから「阿波讃岐の国境の大坂山」で捕  
らわれたのが、「大坂の山中」でと誤り伝えられ  
たのであろう、との説が有力となってきている。

おわりに

紙数の関係で、その後の検討結果のうち、2  
点に絞り触れた。なお勉強を続け、阿波公方と  
ディオゴ結城周辺の歴史について見極めたい。

【参考文献】 文中で、\*番号を付した参考文献の所蔵場所、閲覧方法などにつき以下記す。（\*番号は各章初出の箇所に表示）。

\* 1 近藤家文書（コン2－131）

徳島県立文書館が、板野郡板東村庄屋近藤家の古文書 1477 件を平成 12 年に古書店から購入、そのうち 131 番目の整理番号を付し所蔵、一般公開されている。縦帳、前後欠の古文書。

徳島県立文書館ホームページで「公開資料検索」すると、「古文書番号；コン 200131000。標題；寛永十二年亥九月阿州出身平島又八郎伴天連詮議の件」とされている。

文書館に申し出ると、誰でも閲覧、写真撮影できる。

なおその後、（コン2－131）の原作者、平島家家臣荒井門内のご子孫、阿波市在住、荒井仁氏が、本古文書の下書きと思われる完結した古文書を所蔵されていることがわかり、ご了解を得て輪読、原文と解読文が『徳島の古文書を読む会 史料集（六）切支丹祐賀一卷（編集；谷恵子、記録；三木計男）』として、平成 19 年に発行されている。平成 22 年 1 月現在、若干の余部がある。県立文書館へ照会されたい。所蔵・閲覧については\*2と同じ。（東京大学史料編纂所でも所蔵。）

\* 2 三木計男著『ディオゴ結城了雪と阿波公方』、平成 19 年

徳島県立図書館（請求記号；T280/ユウ 2/1B）、徳島県立文書館、徳島市立図書館（請求記号；T280 ミ）、徳島大学附属図書館（本館 1F 郷土資料コーナー、請求記号：091.9[Mi]）、鳴門教育大学附属図書館、徳島文理大学村崎凡人記念図書館、四国大学附属図書館、阿波公方民俗資料館に所蔵されており閲覧できる。

本書は、日本二十六聖人記念館（長崎市西坂町）の「福者ペトロ岐部と187殉教者関係基本参考文献」にあげられている。

\* 3 『足利家文書 2－Ⅱ－12』（京都在住 足利典子氏所蔵）

個人所蔵文書であり、所蔵者にお願いするほか閲覧は難しい。徳島新聞が、平成17年6月2日の朝刊に当該文書(1枚)の写真を掲載、拡大鏡を使うなどの方法で読み取れる。

なおその後、那賀川町史編さん室編『那賀川町史 資料編 平島公方史料集』、徳島県那賀郡那賀川町、平成18年、266-267頁にも内容を収録。

- \* 4 徳島藩儒員 佐野之憲編纂『阿波志』、徳島県立図書館、1991年。漢文の同書を仮名交じり文に、荒井藍水が訳した『阿波誌』、歴史図書出版社、昭和51年、もある。

いずれも徳島県立図書館などで所蔵・閲覧できる。

(注) 上記のほか下記がある。所蔵・閲覧については\*2と同じ。

三木計男著『福者ディオゴ結城了雪を尋ねて』、平成21年